

増補本系『和歌一字抄』諸本考・序説(続)

— 稲賀敬二先生蔵本と同類の二本について —

妹 尾 好 信

はじめに

本誌第五号(昭和六十年十二月刊)において、私は、「増補本系『和歌一字抄』諸本考・序説——丹鶴叢書本とは別系の一伝本について——」と題して、今は亡き稲賀敬二先生のご所蔵になる『和歌一字抄』の一伝本を紹介した。該本は、当時唯一活字化されていた「丹鶴叢書」所収本とは総歌数や配列にかなりの相違がある本で、増補本系統の一異本として注目すべきことを述べた。仰々しい表題を構えたものの、その後、『和歌一字抄』の諸本を広く探索する余裕がなく、長くそのままになっていた。ところが、このたび縁あって、井上宗雄氏を研究代表者とする国文学研究資料館の共同研究「増補本『和歌一字抄』の諸本整理とデータベース化」(平成十三年度・増補本『和歌一字抄』)に関する研究情報の出版公開(平成十四年度)に参加することになり、『和歌一字抄』諸本の分類・整理、校

本の作成に携わる機会を得た。それを通じて、現在伝存が知られる増補本系『和歌一字抄』の伝本は二十二本であり、総歌数や奥書などによってほぼ五ないし六類に分類されるという知見を得た(中村康夫氏の基礎調査による分類)。そこで、本稿では、旧稿では触れえなかつた稲賀敬二先生蔵本と同類と見なされる伝本について、書誌的な紹介とその特質を報告したいと思う。

なお、この機会に、同じ共同研究に共同研究員または研究協力者として参加された古瀬雅義・田野慎二の両氏にも、それぞれ特色ある伝本について紹介をしていただき、『和歌一字抄』の伝本に関する小特集とすることとした。

一 稲賀本と同類二本の書誌

故稲賀敬二先生旧蔵本(以下、「稲賀本」と称す)に関する書誌は、すでに旧稿に記しているが、今改めて必要事項を略記する。

- ・ 体裁：楮紙袋綴、上下二冊。江戸中期頃写。縦二六・八cm、横二〇・一cm。表紙は、薄茶色無地の鳥の子。
- ・ 外題：「和歌一字抄 上(下)」「(題簽・左上)。
- ・ 内題：「和歌一字抄上(下)」「(巻首)。
- ・ 奥書・識語等：上巻末遊紙に「校合畢」と墨書。
- ・ 総歌数：一一六一首(上巻五九三首、下巻五六八首)。上巻は、題・作者名のみで歌を欠く一首(第八番歌)を含む。
- ・ 墨付丁数：上巻五十六丁、下巻五十三丁。各冊前後に遊紙各二

丁あり。

・行数等：本文二面十二行書き(まれに十三行)。和歌は一行書。

・蔵書印：「巢林菴図書記」(巻首、方形朱印。前稿に「巢林庵図

書部」と記したのは誤り)・「稻賀敬二」(巻末、円形朱印)。

・備考：下巻に、親本以前に生じたと思われる錯簡あり。各冊冒

頭に内題を記し、続いて標目目次を掲げる。本文中、標目には

朱の合点、標目の下に標目番号を朱書。墨による校合異文書入

れあり。

前稿では、当時唯一の活字翻刻本であった「丹鶴叢書本」をもとに

して、それと比較する形で稲賀本の特徴を考察したが、現在では、

宮内庁書陵部蔵本(一五〇・六五三)を底本とした『新編国歌大観』

第五卷所収本が最も利用しやすい流布本と見なされるので、本稿で

は『新編国歌大観』本(以下、「書陵部本」と称す)との比較を通して

て考察することにする。

書陵部本の総歌数は一一七二首(上巻五九六首、下巻五七六首)

であり、一一六一首の稲賀本は十一首(上巻で三首、下巻で八首)

少ない。この歌数がまず類本探索の基準となる。

稲賀本の書陵部本との間の和歌の出入りと配列の相違箇所を『新

編国歌大観』の歌番号によって示すと、次のようになる(半角漢数

字が「新編国歌大観」の歌番号)。ただし、下巻の錯簡箇所は本来

の形に戻して比較を行なった。

〔上巻〕

①：五七五・五九六…(六と五七が逆順、六が欠)

②：二四二六・二七二八・二五二九…(二三が二八の後へ)

③：四六二四八・四七四九…(四七と四八が逆順)

④：八二・八三・八二・八四…(八二と八三が逆順)

⑤：四三・四四…(四三が欠)

⑥：四四三・四四初句(四四第二句以下)・四四六…(四四の初句から四四五の

第二句へ目移りにより誤写)

⑦：五九・五五三・五四四・五四三・五〇・四二・四二・五五六…(四四〇〇〇五二の三首が五五

の後へ)

⑧：五五五・五五五・五五九(五五九が五五の後へ)

〔下巻〕

⑨：〇三・六四…(〇三が欠)

⑩：〇八・六〇・六九・六一…(六〇と六一が逆順)

⑪：七七・七九…(七八が欠)

⑫：七三・七四・七三・七三・七五…(七四が七三の後へ)

⑬：七五・七五・七五・七五…(七五と七五が逆順)

⑭：八四〇・八四三…(八四一が欠)

⑮：八五八・八八八・八八二・八八三・八八九・八八六・八八八・八八四・八八五・八八六・八七九…

(八八八が八五の後へ、八八四・八八九の歌順相違)

⑯：九七九・九五・九七〇・九六九…(九五が九七の後へ)

⑰：九二・九七・九七〇・九六九・九六九・九〇〇・九九一・九〇〇・九〇三…(九七が九二の後

へ、九〇〇が九六の後へ)

⑬…一〇三・一〇四・一〇五・一〇六…（一〇三が一〇五の後へ）

⑭…一〇五・一〇五…（一〇五が欠）

⑯…一〇六・一〇六・一〇七・一〇八・一〇九…（一〇六、一〇七、一〇九が欠）

⑰…一一〇・一一〇…（一一〇が欠）

和歌の総数に加えて、これらの和歌の出入り、歌序の異同が稲賀本の特色ということになる。なお、前稿では「丹鶴叢書本（以下、「丹鶴本」と称す）」との間で比較を行なったわけだが、丹鶴本には⑭の①番歌がなく、逆に①番歌の後に書陵部本にない歌（二七、しらぎくの…）が一首あるので、結果的に稲賀本との和歌数の相違は同じく上巻三首、下巻八首の十一首ということになる。

さて、増補本系『和歌一字抄』の諸伝本のうち、稲賀本と同類と認められる本は、島原図書館蔵松平文庫本と、久曾神昇氏蔵志香須賀文庫本の二本である。以下に、この二本の書誌を記す。

○島原市立島原図書館松平文庫蔵本

- ・体裁：楮紙袋綴、上下二冊。江戸前期写。縦二七・三cm、横二〇・〇cm。表紙は、藍色地の鳥の子紙に、雷文繫ぎに牡丹唐草模様（型押）。

・外題：「和歌一字抄 上（下）」（題簽・左上）。

・内題：「和歌一字抄上（下）」（巻首）。

・奥書・識語等：ナシ。

・総歌数：一一六二首（上巻五九四首、下巻五六八首）。

・墨付丁数：上巻六十六丁、下巻六十三丁。各冊前後に遊紙各一

丁あり。

・行数等：本文一面十行書き。和歌は一行書。

・蔵書印：「尚舍源忠房」（巻尾、方形藍印）・「文庫」（巻尾、長円形朱印）。

・備考：各冊冒頭に内題を記し、続いて標目目次を掲げる。墨による校合異文書入れあり。

○久曾神昇氏蔵志香須賀文庫本（姉小路基綱本）

・体裁：楮紙袋綴、二巻一冊。寛政六年（一七九四）写。縦二〇・三cm、横一四・一cm。

・外題：「和譜一字抄 完」（打付書・左上）。

・内題：「和歌一字抄上（下）」（標目目次題）。

・奥書・識語等：「本奥書云／以基綱卿自筆本聚他摹写之／雖遂一校定誤多欺」「寛政六^甲九月廿七日夜三更於燈下早卒書写畢恐写誤許多平後人正之焉／沙弥興道／右本文中裏書混淆也他日以善本可校訂」。

・総歌数：一一六〇首（上巻五九六首、下巻五六四首）。

・墨付丁数：七十二丁（標目目次二丁、上巻三十五丁、下巻三十四丁）。遊紙なし。

・行数等：本文一面十行書き。和歌は一行書。和歌の上に歌題、下に作者名を記す。

・蔵書印：ナシ。

・備考：冒頭に上下巻に分けて標目目次を掲げ、それぞれ頭に内

題を記す。下巻冒頭には内題ナシ。行間補入歌が全部で四十三首あり。うち、朱書補入歌十六首(上巻十一首、下巻五首)、墨書補入歌二十七首(上巻十二首、下巻十五首)。朱・墨による校合異文書入れあり。

(志香須賀文庫本の書誌情報については、日比野浩信氏に提供していただいた)

この二本のうち、志香須賀文庫本は、久曾神昇氏編の「日本歌学大系」別巻七(昭61 風間書房)に収められた『和歌一字抄』に校合本として用いられ、「解題」にその紹介がある(ちなみに、底本に用いられた橘長頼本と、別に校合本にされた日野資時本もいずれも久曾神氏の所蔵になる志香須賀文庫本であるが、本書とは類を異にする本である)。姉小路基綱(嘉吉元年(一四四一)―永正元年(一五〇四))自筆の本を写したという本奥書があり、寛政六年(一七九四)に「沙弥興道」なる人物が写した本である。行間補入歌四十三首のうち四十二首は、『新編国歌大観』第五巻の「解題」に翻刻されている。一首少ないのは、空「池水に」の歌の次に朱で補入された、

(本四)
よ、芦葉

顕季卿

『見わたせはあしはおしなみ茂りあひて道たとくし堀江こく舟の一首を、流布本共番にあるという理由で削除されているからである。しかしながら、この歌は、肩に「家」と注記があるように、明らかに顕季の家集からの補入であるため、他の朱書補入歌と同列に扱うべきものである。他の朱書補入歌十五首のうち、一首(『古今集』

の躬恒歌を除く十四首が「家」と注する顕季の歌なのである。なお、「日本歌学大系」別巻三の「解題」は墨書補入歌を二十八首とし、『新編国歌大観』第五巻では、そのうちの一首、

花下日暮

行 盛

妻木こり帰るしつをにことつて、今夜は花の下にやとらんを流布本三番にあるという理由で削除され、二十七首を翻刻しているのだが、「妻木こり」の歌は確かに行間に記されているが、他の墨書補入歌にはすべて存する「補」の注記がなく、他が本文とは別筆であるのに対してこの歌だけは同筆と見られる。したがって、この歌は他本による補入歌ではなくて書写の際に生じた脱落を書写者自身が補ったものと考えられ、正規の歌として扱うべきである。

二 松平本・基綱本の歌序

松平文庫本(以下、「松平本」と称す)と姉小路基綱本(以下、「基綱本」と称す)の二本が稲賀本と同類の本であることを確かめるために稲賀本に見られた二十一箇所について、書陵部本との間の和歌の出入りと歌序の相違を調べてみると、次のようになっている。○印が稲賀本に一致するもの、×印が書陵部本と一致するものである。

	書陵部本との相違点	松平本	基綱本
① 矣と毛が逆順、矣が欠		○	○

② 二五が二八の後へ	○	○
③ 四七と四八が逆順	×	×
④ 二二と三三が逆順	×	×
⑤ 四三が欠	○	○
⑥ 四四から四四へ目移りによる誤写	×	×
⑦ 五五〇と五五二の三首が五五五の後へ	○	○
⑧ 五四が五五の後へ	×	×
⑨ 六三が欠	○	○
⑩ 六九と六二〇が逆順	○	○
⑪ 七八が欠	○	○
⑫ 七四が七三の後へ	○	○
⑬ 七五と七四が逆順	×	×
⑭ 八四が欠	○	×
⑮ 八八が八五の後へ、八四と八六歌順相違	○	○
⑯ 九五が九七の後へ	○	○
⑰ 九七が九二の後へ、二〇二が九六の後へ	○	○
⑱ 一〇三が一〇五の後へ	○	○
⑲ 一〇四が欠	○	○
⑳ 一〇六、一〇七、一〇九が欠	○	○
㉑ 二〇三が欠	○	○

この表によれば、書陵部本に比して稻賀本に欠けている七首の歌

(六四三・六三二・七六八・四二二・二〇五) はすべて松平文庫本にも欠けていることがわかる。基綱本でも六首まで一致するが、八四の一首が存していることのみが異なる。松平文庫本の和歌総数は一一六二首で、稻賀本の一一六一首より一首多いのだが、それは稻賀本が四四の初句から四五の第二句へ目移りにより誤写を生じていて一首少なくなっているけれども、松平本にはその錯誤がない(基綱本にもない)ため、松平本は和歌の出入りについては完全に稻賀本と一致していると言ってよい。ただし、歌序の相違については、稻賀本と書陵部本との間に見られる歌序相違箇所十四箇所(①②③④⑥⑦⑧⑩⑫⑬⑮⑯⑰⑱)のうち、九箇所(①②⑦⑩⑫⑮⑰⑱)は稻賀本と一致するものの、五箇所(③④⑥⑧⑯)は書陵部本の方に一致するのである。そして、基綱本も、歌序の相違箇所については松平本と全く等しい。この点に関しては、稻賀本は松平本・基綱本と近接した関係にあるが、歌序については松平本と基綱本との関係がより密であると言えそうである。ところが、実は、基綱本には、稻賀本・松平本に比して独自の相違箇所が次の五箇所存在する。

- ・ 七三が欠
 - ・ 三六と三七が逆順
 - ・ 四七と四八が逆順
 - ・ 七三が欠
 - ・ 七六が欠
- すなわち、基綱本は、稻賀本・松平本に比して欠落歌が三首多く、

独自の歌順相違箇所が二箇所存するのである。基綱本の総歌数が一
一六〇首で松平本の一一六二首より二首少ないのは、^{四二}が存する
かわりに^{三三}、^{三五}の三首が欠けていることによる。したがって、
形態面から見ると、稲賀本との近接度を言うなら、松平本が、本
来の総歌数が同じであり、四箇所相違箇所があるものの歌序も非
常に似通っており、もつとも近い形態の本であることになる。基綱
本は松平本に近く近いけれども、歌の出入りや歌序に独自の異同を
持つており、松平本よりはやや遠い関係の本というべきであろう。

これら三本のうち稲賀本は、先にも触れたように、上巻において
八は歌題と作者名のみで歌を欠き、^{四四}から^{四五}への目移りによる誤
写がある他に、下巻に親本以前に生じたとおぼしき一丁分の錯簡が
存在するというように、転写の過程で生じた欠陥がまま見られる。
また、基綱本にも^{三〇}のように転写の際の脱落が起こって補入され
た歌がある。そういう点では、松平文庫本が最もすつきりした形
の本だといえることができる。

三 稲賀本・松平本・基綱本の歌序の検討

ここで、稲賀本・松平本・基綱本三本の書陵部本との歌序の相違
箇所について、増補本系他伝本の状況と考え合わせて、もう少し詳
しく検討を加えたい。

① 五と五が逆順、五が欠

五「霜にあひて…」と五「大井河…」が書陵部本と逆順になっている

本は他にも多く、むしろ書陵部本のような歌順の本が少ないと言っ
てよい。書陵部本と同類の川越市立図書館本・久曾神昇氏蔵日野資
時本・神宮文庫本・樋口芳麻呂氏蔵本と、蘆庵文庫本・彰考館本以
外の本はいずれも逆順になっている。

五「見渡せば…」の欠落はこの三本独自であり、他本はすべてこの
歌を有している。基綱本は同歌を六一「池水に…」の後に朱で補入し
ているが、それは頭季家集からの補入で、他本との校合による補入
ではないことは前述した通りである。

② 二五が二八の後へ

二五ほのかなる…」が二八「帰るべき…」の後にくる配列は、この三
本独自のものである。久曾神昇氏蔵極長頼本・丹鶴叢書本・日比野
浩信氏蔵本・松野陽一氏蔵本の四本は二六「心あらば…」が二九「卯花
の…」の後にくるという相違がある以外は諸本書陵部本と同じ配列
である。

③ 二四七と四六が逆順

二四七「高根には…」と四六「道すがら…」が逆順になっているのは、諸
本の中で稲賀本のみである。稲賀本では四六に異文注記があるのに
歌序に関する注記はない。親本がすでにこの順序になっていたの
であろう。

④ 二六と二六が逆順

二六「秋の夜の…」と二六「あけはば…」が逆順になるのも、諸本のう
ち稲賀本だけである。

⑤ 四三が欠

四三「しがふべく」を欠くのは、この三本の他に、長頼本・丹鶴本・日比野本・松野本・蘆庵本がある。これら五本は同類と見なされる伝本である。ただし、丹鶴本は、「一本」として欄外に補記している。なお、この歌は言六に重出する歌である。

⑥ 四の初句から四の第二句へ目移りにより誤写

これは稲賀本のみが有する転写上の錯誤であることは先に述べた。

⑦ 五のく五の三首が五の後へ

五「心をば」から五「末葉ふく」までの三首と五「有明の」から五「白菅の」までの三首が入れ替わる形になるこの配列は、

多くの伝本に見られる。書陵部本と同じ配列なのは、同類の川越本・資時本・神宮本・樋口本の四本と彰考館本だけである。長頼本・丹鶴本・日比野本・松野本・蘆庵本は五を欠くが、配列は稲賀本等と同じである。書陵部本は、五「一」、「五」に「六」、五「七」に「五」に「二」とそれぞれ歌題の肩に番号を付している。これは、五「三」に「四」とあるべきものを脱したと思われる。他本により配列の異同を注記したものである。

⑧ 五が五の後へ

五「ますらをば」が五「民の」の後にきて上巻末尾の歌になるこの配列は稲賀本のみのものである。筑波大学本・藤平泉氏蔵本は五と五が逆順になっているが、稲賀本とは別の相違である。

⑨ 六三が欠

六三「たがために」を欠くのは、稲賀本・松平本・基綱本三本のみであり、他本にはない特色である。ただし、同歌は言六に重出する歌である。

⑩ 六と六の逆順

六「ちらぬまは」と六「こぬもうし」が逆順になるのも、この三本のみ特色である。なお、彰考館本は六を欠いている。

⑪ 七六が欠

七「ありま山」を欠くのもまたこの三本のみ特色であり、他本にはすべて存在している。

⑫ 七が七の後へ

七「詠むれば」が七「紫に」の後にくるこの配列は、稲賀本・松平本・基綱本三本のみである。ただし、七の位置は諸本定まらず、蘆庵本・醍醐寺本・大阪府立図書館蔵石崎文庫本・藤平本・篠山市青山歴史村本・長頼本・丹鶴本・日比野本・彰考館本・京都大学本は七「むさしの」の後であり、筑波大本と書陵部蔵鷹司本は七「月影に」のあとにある。書陵部本には、七「二」、「三」に「七」に「一」と歌の肩に番号が記される（『新編国歌大観』では底本にある七の肩の注記を脱している）。これは、七の次に七がくる配列を有する本との異同を注記したものと考えられる。

⑬ 七と七の逆順

七「あまのとを」と七「あけぬとも」が逆順になっているのは稲賀本のみで、他の増補本系諸本はすべて書陵部本に等しい。

⑭ 八四が欠

八四「水の面に……」を欠く本は多く、稲賀本と松平本の他に、石崎本・篠山本・鷹司本・筑波大本・藤平本・長頼本・丹鶴本・日比野本・蘆庵本がそれにあたる。一方、基綱本と、石崎本等と同類の醍醐寺本に存するなど、ややゆれのある一首である。この歌は、すぐ近くの八五に少し歌句を変えて重出している。

⑮ 八六が八七の後へ、八四〇八五歌順相違

八五「おちたきり……」から八六「緑にて……」までの間の歌序は、諸本すこぶる複雑である。書陵部本と同じ配列になっているのは、同類と目される川越本・資時本・神宮本・樋口本と、彰考館本だけである。稲賀本・松平本・基綱本と同じ配列を持つ本には、他に石崎本がある。他の諸本は、石崎本と同類の篠山本・醍醐寺本・鷹司本・筑波大本・藤平本が、八五〇八六〇八六〇八七〇八八〇八九〇九〇の順であり、長頼本・丹鶴本・日比野本・蘆庵本が、八五〇八六〇八七〇八八〇八九〇九〇の順（八六〇八七〇八八〇八九〇の順）つまり、稲賀本等三本に比べて八五の位置が異なるのである。

ところで、書陵部本には、八五から八六まで、八七を除く十首の歌題の肩に「一」から「十」までの番号が付されている。すなわち、八五に「一」、八六に「三」、八七に「四」、八八に「五」、八九に「六上」、九〇に「十」、八五に「九」、八六に「八」、八七に「七」とあるのである。これを番号順に配列すると、八五〇八六〇八七〇八八〇八九〇九〇となり、稲賀本等三本の八五から八六までに一致する。書

陵部本が校合した本が稲賀本等に近い本であったことが知られる。

このことについて、『新編国歌大観』第五卷の「解題」（井上宗雄・西村加代子氏執筆）には、「八五以下は、底本のままでは標目と歌の内容とが対応せず、松平本はほぼ「二」「三」の番号順に配列されている。すなわち八五〇八六〇八七〇八八〇八九〇九〇の順である。底本八六の「六上」というのは、おそらく元來八六が八七の次にあり、その題に「六下」とあつたものに対するのではなからうか」と推測されている。「底本のままでは標目と歌の内容とが対応せず」云々とあるのは、書陵部本の配列に従うと、「ふりつみし雪はきえねど吉野山施の音こそ春は知りけれ」という八六の歌の歌題「同」が八七の歌題「恋不知程」を承けることになり、いかにも不都合なのが、肩の番号「二」によって八五の後に置くと、「滝音知春」の歌題を承けることになってふさわしいこと、そして、八六の歌題「依水知山紅葉」は、書陵部本の位置では「不知」の標目下になるが、明らかに前の「知」の標目下でなければならぬことをさしている。

⑯ 八五が九七の後へ

八五「尋ねても……」が九七「宿毎に……」の後にくるのは、書陵部本と同類と見なされる本以外はすべて同じである。書陵部本のような配列では、離れたところにある八六と八七の歌題がともに「毎年見花」となつて不自然である。八五〇八六の順に並んで、八七の歌題に「同」とあるのがふさわしい。書陵部本の八五に「一」、八六に「二」、八七に「三」とそれぞれ歌題の肩に注記しているのは、これら他本により配列の異

綱本の三本が共通して独自の対立異文を示している例を次に掲げる。
上が書陵部本の表記・下が三本の表記である。

〔作者名自体の相違〕

橘成元—橘成光 三三三・五二

坂上定成—坂上定則 六三三

俊増僧都^{後醍醐天皇}—俊増僧都^{建武天皇} 八五五

〔「卿」「朝臣」の称の相違〕

師賢朝臣—師賢卿 三三

定家—定家卿 三三〇・八二二・九五三〇四・三九七・五七五・五五五・六六六・七〇四・

七二二・九七九

匡房—匡房卿 二七四・四三三・四四四・四四六・五〇四・五九一・九四七

行宗—行宗卿 二八〇・四〇〇・五〇六・六四四・六四六・九一八

俊頼—俊頼朝臣 三三三・四一四・四三三・四三八・四四三・四四五・四五九・四七〇・四八七・

四九〇・四九六・五〇二・五〇四・五〇八・五三三・五三九・五七二・六二〇・六四四・六五九・六六六・

六八一・六四四・六九〇・六九七・七二二・七三六・七四四・七四六・七五五・七六二・七六三・七七一・

八七三・八八三・八四四・八四三・八四四・八四九・八五三・八六六・八七三・八七六・八七九・八八〇・八八六・

九一〇

経信—経信卿 四〇六・四四七・五〇〇・五七八

範永—範永朝臣 四三三・五〇六・五三三・五五九・九一六

定頼—定頼卿 四三三

実方—実方朝臣 四三三

仲実—仲実朝臣 四三三

俊綱—俊綱朝臣 五七七・五七五

通俊—通俊卿 五三〇

顕季—顕季卿 五三一

顕輔—顕輔卿 五三一

経信母—経信卿母 五三〇

实行—实行卿 八八六

能宣—能宣朝臣 八九四

〔氏の表記法の相違〕

藤永実—藤原永実 四〇五・七六一

藤国房—藤原国房 五七五

藤経衡—藤原経衡 六〇一

藤隆資—藤原隆資 七五五・一〇二八

藤憲房—藤原兼房 六一（作者名の相違でもある）

藤景名—藤原景名 一〇五二

〔その他の相違〕

赤染—赤染衛門 三九三

仲正—源仲正 四六〇

良運—良運法師 四七六

関白—関白忠通 七四四

三本の作者名表記の特色としては、名に「卿」「朝臣」の称を付すことを原則としていること、氏を記す場合は「藤」のような略称は用いないという方針をとっていることがあげられる。「卿」「朝臣」の称に

ついで、これら三本とは別類に属するが樋口芳麻呂氏藏本にもやと同じ傾向が認められ、三本と樋口本に共通する作者名の異文を含めると他に十数例を追加することができる。そして、これらは原撰本系・中間本系統の本の作者名表記に一致するものがかなり存する。作者名表記に関して言えば、稲賀本等三本は、原撰本・中間本にいくらが近接しているかに見えるのである。しかし、これは三本が成立において原撰本により近いとか、直接影響を受けているとかいうわけではなく、ともに作者名には「卿」「朝臣」の称を厳密に付すという同じ方針がとられているためであろうと思う。

最後に、歌本文に関して、書陵部本において欠字となつている箇所が、稲賀本(種)・松平本(松)・基綱本(基)ではどうなっているかを記しておく。書陵部本の本文も原本の表記に従つて引用する。

三五 いとしくしとろにみゆるかるかやの(種)

うれ本下つ葉に降るしら雪(種)

〔第四句欠〕 ふれる白雪(松)

〔第四句欠〕 ふれるしら雪(基)

四三 「成もゆくかなきす鳴かたのみのおきの焼原

※三本ともこの歌を欠く

五二 影見えて汀にたてる波はみなむへし(種)

若たつはむへしや千代を思なるへし(種)

あしたつはむへし(種) 「よを思なるへし(松)

あしたつはむへし(種) 「思ふなるへし(基)

四五 「まの萩原さきにけり行かふ人の袖匂ふまで

白哲の(種・松)・しらすけの(基)

六三 たかために旅ねをすれば時鳥(種) 「さよふかすらん

※三本ともこの歌を欠く

六四 もしきのみかきのはらの桜花春(種) 「にははさらめや

第四句欠(種・基)・春したえすは(松)

六五 春なれば(種) 「山里にすめはそ見つるけさの曙

※第二句欠(種・松)・基

五三・五二では稲賀本のみ欠字がなく優位に立つが、六四では松平本が欠字がなく優位であるなど、三本それぞれである。四三・六三は三本とも歌そのものを欠いていることは、書陵部本に欠字があることとあるいは関係があるのかも知れない。

おわりに

以上、稲賀敬二先生旧藏本は島原図書館蔵松平文庫本・久曾神昇氏藏姉小路基綱本と同類の本であることと、その三本が共通して有する特色について述べた。三本にはそれぞれ他本と校合されて異文注記が施されており、それらの異文を細かく検討すると相互の関係が明確になるのではないかと思うが、今回は紙数の都合で省略した。冒頭に記した共同研究の成果としての校本の出版が実現したあかつきには、より多面的な本文研究が可能になることが期待される。

——せのお・よしのぶ、広島大学大学院文学研究科助教——